

「内田有紀に似てるとよく言われます」そうプロフィールにあった女に実際会ってみたら短髪という以外どこにも内田有紀に似たところのないただの太った中年女で、でも生年月日が内田有紀と同じなんですとその女は言った。

やばい女だということは店で飲み始めてすぐにわかった。終始うつむき加減でおれの目を一度も見ようとしないまま、職場（アイスクリームのコーン工場）で自分がいかに毎日つまらない思いをしているかを異様な早口でしゃべった。それから急におれのことを「ヤマガミくんに似ててかっこいい」と言い、職場の誰かかと思っただけで聞いていたらそうではなく、数日前に元総理が撃たれた事件の犯人のことだった。嬉しくないし、ずっと目をそらしてしゃべっているくせにいつおれの顔を確認したのだろうと不思議だった、かと思えば唐突に立ち上がって何も言わずにトイレへ行った。そのとき女の履いている汚れた白いスニーカーのかかとの部分が見えたのだが、そこにはマジックで「おおしま」と女の苗字が大きく書かれていて思わずビールを吹きそうになった。

すぐに逃げた方がいいとおれの直感は告げていた。しかし酒の魔力というべきだろうか、酔いが回ってくるのだんだん女のやばいところもそれはそれで面白い気がしてきて、女はわざとなのか無意識なのかテーブルの上におっぱいを乗っけていて目がどうしてもそこに行ってしまうし、あ、ちょっとやりたいかも、と一度思ったら変なムラムラムが盛り上がってきて「暑いしホテル行きますか？」と直球で訊いてみたら「いいっすね」とやっぱり下を向いたまま即答された。おれたちは一番近くのホテルに入った。

なんだか陰毛の薄い女だなと思いつつながらあそこを舐めていたら突然女は「あーっ」と大声を上げ、自分の陰毛をわしづかみにしてブチブチと引き抜いた。そうかそのせいで薄いんだなと理解できたけれどもうおれはその姿を見た途端に萎えてしまっただけになり、「ちょっと飲みすぎたかしんない。ごめんなさいです」と言い訳して布団から出てトイレに立った。女は「いいっすよ」と言った。トイレから戻ってくると女はもう服を着て座っていたのでおれも服を着て隣に座った。

サービスタイトムで入ったのであと二時間以上残っていた。すぐ出るのもアレだしとりあえずテレビをつけてチャンネルを切り替えていくとCSの洋画放送で若いブラッド・ピットが裸になって殴り合いをしている場面が映った。「ファイトクラブ」かな学生の頃に見たな懐かしいなと思ってなんとなくそのまま見ていたのだが、ふと隣を見ると女は自分のバッグに手を入れて何やらゴソゴソやっている。やがて紙の束を取り出し「これ」と言っておれの目の前に突き出した。

「わたしの書いた小説です読んでくれませんか？」

いや何もかもいきなりだなあこの人、と面食らった。たしかにおれはプロフィールの趣味欄に読書と書いていて実際に小説は海外ものを中心にわりと読んでいる方だと思いが、素人の書いたものを読みたいとは思わなかった。けれど時間は余ってるし途中でリタイアし

てしまった負い目もあるのでノーとも言えず仕方なく紙束を受け取り、「へー、小説を書くんですね」とか言いながら目を落とした。

「わたしはふっくん派」と一行目にタイトルらしきものがあるそれは次のような文章で始まっていた――。

わたしの名前は大島なつき。昭和五十年生まれの十歳、小学四年生。

日本に生まれて日本で育った。でも遠い外国からおととい日本にやってきたばかりのように自分のことを浮いた存在に感じている、そんな子ども。それがわたし。

なんて、自己紹介から始まるのって、いいね。コバルト文庫みたいで。ジュブナイル感にあふれて。

今日は昭和六十年十二月二十日、金曜日。

――とわたしがこう語れば、今日は昭和六十年十二月二十日金曜日なのだから、言葉って不思議。わたしの現実は大島なつきの言葉でできている。

わたしはいつものように登校して、教室に入り、自分の席でぼんやり座っていた。この一週間、ずっと曇り空が続いていて、今朝も外はずごく寒かったけれど、教室の中はストーブが効いていて少し暑いくらいだ。

八時半からのホームルームまで、まだ五分くらいある。わたしの席の近くで数人の女の子たちが集まって談笑していた。

べつに聞くつもりもなかったけれど、すぐそばでしゃべるものだから会話が勝手に耳に入ってくる。今年の紅白に誰が出るかという話から、ジャニーズのアイドルに話題が移り、シブがき隊のメンバーで誰が好きかという討論になっていた。

「ねえ、大島さんは誰派？」

急にわたしの名前が出たのでびっくりして顔を上げた。柄本さんという、背が高くて色黒でグループのリーダー格の子が笑顔でわたしを見ていた。

「ダレハ？」

思わず柄本さんの言葉をバカみたいに繰り返してしまふ。

「だから、シブがき隊。誰派？」

柄本さんはそうすることがあたり前みたいに再び訊いた。女の子たちの視線がわたしに集中した。

グループの一員でもないわたしになぜいきなり話を振ってきたのかよくわからないけれど、とにかく何かを答えないといけない雰囲気だ。

でもこういうときわたしはうまく返すことができない。注目されると緊張してしまふ。それにシブがき隊のこともよく知らない。アイドルに興味がないのだ。

「……えっと、わたしは、その、誰派かと訊かれると、まあその、なんだ、みんなそれぞれにいいと言えば言えるし、悪いと言えば悪いところもあるかもしれないけれど、うん、一人を選べと言われるなら、そうねえ、難しいけれど、それぞれ個性的であることでもありますし、誰かを選ぶということはほかの誰かを選ばないということでもあり、うむむ、いず

れの派であるかと、それでもあえてわたしに問うならば、あ、わたしというのはつまり、ほかの誰でもない、大島なつきという、今ここにいるこのわたしのことなんだけど……」

そこでチャイムが鳴った。先生が教室に入ってきて、みんな自分の席へ戻った。「きりーっ！」と日直の男子が声を上げた。

それから再び彼女たちと話をする機会のないまま、午後三時五十分、わたしは帰宅した。

おやつについて母に訊くと、「なんもないね。無だよ。無」というので、いったんは納得したフリをして引き下がった。でも絶対なんもないはずないと思ってこっそり仏壇のところへ行ったら、どつかからのもらいものらしき栗まんじゅうが置いてあり、「和菓子かよー」と落胆しながらもひとつ失敬した。自分の部屋に持って帰って「おいしくないなーポッキーがよかったなー」と思いながら最後まで食べた。まあひとまず空腹はごまかせたからオツケーだよね。

夕飯までのあいだに誰派かを決めておこうと思ひ、姉の部屋へ入った。いつもながら乱雑に散らかった部屋で、床に何冊もの雑誌が落ちていいる。そのうちの一冊を拾い上げた。

「明星」というタイトルの雑誌だ。アイドルの情報が数多く掲載されている。わたしは床にあぐらをかいて、雑誌をぱらぱらとめくっていった。ページの隙間におかき、あるいはせんべいの細かなカスがたくさん詰まっていた。

わたしが手に取ったのは最新の号ではなかったけれど、シブがき隊についてはそれなりに知ることができた。

やっくん、もっくん、ふっくん、の三人組アイドル。いや、それくらいは前から知っていたのだ。ただ、今までは三人の顔の見分けすら全然つかなかったのだが、雑誌に掲載された写真をつくづく眺めてみれば、ちゃんとみんな違う顔をしているし、とくに似たところがあるわけでもない。それに、三人にはそれぞれにイメージカラーが設定されていて、たとえ顔の見分けがつかなくても、色で誰かを識別できるように考慮されている。やっくんは青、もっくんは赤、ふっくんは黄色の衣装をいつでも着用していて、三人が普通の高校生役を演じた映画「シブがき隊 ボーイズ&ガールズ」の作中でさえこの色分けがおこなわれていたのだ。

それはともかく。

やんちゃなリーダーのやっくん、正統派美少年のもっくん、優しげな雰囲気のもっくん。

この三人の中から、誰か一人をわたしは選ばなければならない。

言うまでもないことだけれど、複数ある対象からどれかひとつを選択するには、対象同士を比較するための基準が必要だ。問題は、その基準がわたしの中にはないことだった。

普通こういう、アイドルやなんかを選ぶような、いわゆるファン化する場面においては、ことさらに意識せずとも、好きとか嫌いとかの情動によって、あらかじめ選択基準が築かれているもの、なのだろう。ところが、いくら三人の写真を見つめていてもわたしは何とも思わない。感情が動かないから、選びようがないのだ。

それでも選ばなければならない。誰派かを決めないといけない。という切迫した義務感だ

けがわたしの中にある。であれば仕方がない。基準を自分で作るしかない。

まず、人気の量、というものが選択基準になるのではないかとわたしは考えた。

雑誌の中の情報量から察するに、やっくんともつくくんが人気を二分しているようだ。そういえば今朝の柄本さんたちも、やっくんかもつくくんかで論争していたような気がする。ふっくんの名前が出てきた記憶はない。

ではやっくんかもつくんにするか。でも、人気の量が多いからといって、選ぶ理由になるのだろうか。人気の量が少ないから選ぶ、という選び方もあるのではないか。とこう考えてみると、「人気の量が多い方を選ぶ」という選び方と、「人気の量が少ない方を選ぶ」という選び方と、このふたつの選び方のどちらかをまず選ばないといけないという事態になる。シブがき隊のメンバーを選ぶ前に、選び方をまず選ばないといけないのだ。そうすると今度はさらに「選び方」の選び方をまた選ばないといけない。無論これは無限後退に陥る。

だめだだめだ。この道に先はない。そもそも、絶対的な基準にもとづいて選ぶほうとするからうまくいかないのだ。基準はもつと実践的な、便宜的なものでもいい。

たとえばやっくんを選んだとしたらどうだろう。今朝の話を聞いた限りでは、柄本さんを含めグループの半分がやっくん派だった。その上わたしがやっくん派だと言ったら、彼女たちはライバルが一人増えたと考えて、怒りや憎しみをわたしに向けるかもしれない。わたしはそもそもグループの一員ではないので、その可能性は大いにある気がする。

もつくくんを選んでも同じことだ。わたしはクラスに友達と呼べる子もないし、もともと弱い立場にいるのだ。人間関係のバランスがちよっとでも狂えば、いついじめが始まってもおかしくない。

不要な憎しみを生まず、いじめられずに済むためには、ふっくん、ということになる。実践的、便宜的に基準を探れば、その一択しかわたしにはないはず……。

いや、待て待て。本当にそうなのか？ だいたい、わたしごときの地味系女子が「やっくん派」あるいは「もつくくん派」を名乗ったところで、柄本さんたちのようなイケてる女子連が何の痛痒を感じるといふのだろう。「あら、庭先にハコベラが」程度のエモーションすら生まないのではないだろうか。ましてライバル視するなど笑止……。むしろわたしがふっくんを選んだ場合に柄本さんたちに与えるかもしれないネガティブバイブレーションこそより深刻だと想定できる。たとえば彼女は、現実として目の前にふっくん派が現れることによって、この世には自分たちの到底理解のおよばない存在があることを知るだろう。それは安定した世界を外側から無効化する全き他者の出現である。彼女らはまず総毛立つ恐怖を感じ、絶叫して逃げ惑い、しかしそのパニックがいったんおさまったあとには、猛烈な羞恥を覚え、それから自分たちをそんな目に遭わせた他者であるわたしに対して、激しい憎悪を抱くことになるのだ。そして始まる、いじめ、いじめの日々……。

ナンチャッテ。そんなわけあるかい。

いずれにせよ、わたしの中のエロス／欲望がシブがき隊に向けて起動しない以上、いろんな理屈を並べてみたってどうにもならない。誰を選んだとしても何だっけ起こりうるのである。わたしみたいな分別のないただの子どもに予測なんかできない。もうわたしはこれ以



「ケツケツケツ、お仕置きの時間だよ」

悪魔みたいな声で言ったきゅうりは、ついに真木さんの息子さんに飛びかかった。この時点でわたしはもう、これは遊びじゃなくていじめなんだと思っていたのだけれど、次にきゅうりのとった行動は予想できなかった。

きゅうりは真木さんの息子さんの股間を、猛烈な勢いで揉みしだき始めたのである。

「ヒーッ、やめろー」

真木さんの息子さんが悲鳴を上げた。甲高い声だった。腰をくねくねさせて逃げようとするが、男の子たちにごちり体を固められているので逃げようがない。きゅうりはここを先途とばかり、両手を存分に使って真木さんの息子さんの股間を揉み上げこすり上げ、それはもう大変熱心な仕事ぶりであり職人の技って感じだった。

「きゃー、やめ、あ、アヒー」

真木さんの息子さんの様子が少し変なのになわたしは気づいた。頬が熱っぽく朱に染まり、目はトロンとしている。いや、彼だけではない。きゅうりをはじめ周りの男の子たちみんなが同じような表情、夢見るような眼差しで、口は半開きになっているのだった。

「う、ううー、おおー」

真木さんの息子さんの声はだんだん低くなり獣じみたうなり声に変化しつつあった。あんな残酷な勢いで股間を責め立てられて、真木さんの息子さんの息子さんは現在いかなる状態にあるのでしょうかとわたしは想像をたくましくした。なんてことは決してない。純真無垢なお子様だからね。ただ焚き火を眺めているときみたいに、わけもわからず見入っていたことは事実だけれども。

と、右手に持ったリードが引つ張られてハツとした。たんくろうがうんこを終えて、歩き出そうとしていたのだ。ひょっとするとわたしもまた男の子たちと同じような表情をしていたのかもしれないが、たんくろうのお陰で我に返ることができた。わたしは男の子たちから視線を引き剥がし、たんくろうと一緒にその場を去った。

背後から真木さんの息子さんの悲鳴がまだ聞こえていた。いったん低くうなるようだった声はまた急激な高音へ変わっていった。あれはきっと歓喜の声だとわたしは思った。アイドルを前にした女の子みたいな黄色い悲鳴。——黄色い悲鳴？ 黄色といえぶつくくん。もちろんぶつくくんの色だ。

というわけで、結論が出た。これも何かの縁。わたしはぶつくくんを選ぶことにした。そんなつまらない理由で、とか、こじつけじゃないか、とか言うなかれ。選ぶということは、そもそもひとつの跳躍なのだ。目を閉じて跳ぶことだ。現実において何かを選びとり、選ばなかったほかの数多を捨てるその瞬間、理由なんてものは溶解するのだ。

とか言ってみただけ。ほんとはね。ほんとはぶつくくんを選ぶにあたって、もっと誰でも納得できるような経緯を経るはずだったのだ。(ヘルハズって何だよ。ヘルハズ。ていうか経緯はたどれよ。経るなよ。「朝食を食べる」みたいな。でもわたしは赦しますけどね。イエスのように。あなたがたを赦します……)

たとえば子ども会のイベント、去年のクリスマス会か何かで真木さんの息子さん(長いの

で以下MJと呼称。今さら)がシブがき隊の「Zokkon命」を仲間と歌い踊ったでしょう。そのときMJが誰の役をやったのかわたしは思い出せない。股間責めからほうほうの体で逃げ出したMJに直接訊いてみようとしたわたしはそのあとを追っかける。けれど六年生の全力ダッシュに追いつけるはずもなく、二人の距離は開くばかり。仕方がないのでたんくろうをけしかけると、たんくろうはまさに単駆狼としての本領を発揮してMJに後ろから襲いかかる。アスファルトの地面に押し倒して今にも食い殺さんばかりの勢いだ。そこへわたしが颯爽と登場、たんくろうの下で悲鳴を上げてもがいているMJに問いたです。「MJ! 去年のクリスマス会でやったの、誰の役?」で、ふっくん。ふっくんの役をやっていたことが判明する。子ども会のリーダー的存在のくせに、やっくんではなくふっくんを選んだ謙虚な男MJ。そういうところだよ。そういうところ。わたしは感銘に打たれ、ふっくんを選ぶことにする。これならみんな納得だろう。

でもそういうことは起きなかった。現実には起きなかったのだからシャーンナイ。だいたい「わたしはふっくん派」って一番最初に書いてある以上、これは既定路線なのであり、運命。ジャカジャン。とにかくわたしは跳ぶ。ふっくんを選ぶ。

十二月二十一日の土曜日またどんよりと曇って寒い朝だ。でも来週は終業式があるだけですぐに冬休み。みんなすでに休み気分なのか、朝から浮かれ騒いで教室内はやかましい。柄本さんたちのグループは昨日と同じようにわたしの席のすぐそばに集まって談笑していた。わたしはふっくん派であることを今度こそ伝えなさいといけないと覚悟を決めていて、そのときを待った。

そう。今やわたしはふっくん派。昨日の優柔不断なわたしとは違うのだ。話がこっちに振られるやいなや、その事実を彼女らに厳然と突きつけてやろうと思っていた。

どうしたのか、柄本さんたちはわたしにチラリと目をやることもなく、チャイムが鳴り、ホームルームの時間になってしまった。

まあいい。次の休み時間には話しかけてくるはずだ、とわたしは思った。けれども、一時間目が終わっても二時間目が終わっても、自席で緊張のあまりコチコチになっていくわたしに話しかけてくる者は一人もなく、そもそも、シブがき隊の話題自体、今日は一度も出ていない様子だった。

やがて四時間目が終わり、終わりの会が終わわり、日直が「先生さよなら。みなさんさよなら」と言い、みんなが同じことを言い、みんなはそれぞれの自宅へ帰るためにそれぞれのランドセルをそれぞれの背中にかつきながらそれぞれ椅子と机をガタガタさせて立ち上がった。

柄本さんたちも教室前方のドアに向かって歩き出す。

逃げられる!

そう思った瞬間、わたしは黒ひげ危機一髪みたいにポーンと椅子から飛び上がり、ガッシ

りと柄本さんの手首をつかんでいた。

「え、何？」

柄本さんがびくくりした顔で振り返る。周りの女の子たちもわたしを見る。

わたしはスッと息を吸い込み、口を開いた。

「……わたしはふっくん派」

言った。今、言った。

でも、柄本さんたちはまったく同じ表情のまま、何の反応も示さない。

一秒、二秒、三秒……。

誰も、ピクリとも動かない。

あ、なんか、時間止まった？

違う。柄本さんたち以外の子どもたちは皆ぞろぞろと教室から出て行っている。

言葉が足りないのだ。とわたしはだしぬけに気がついた。

「わたしはふっくん派……であることを」とわたしは言い、「公言してはばからない女」と続け、「ですから」と結んでみた。

「わたしはふっくん派であることを公言してはばからない女ですから」

柄本さんは自分の手首をつかんでいるわたしの手を、これ以上ないくらい優しく振りほどくと、女の子たちに向かって、

「帰りに公園でゴム跳びしようよ」

と言った。

女の子たちは口々に「賛成！」と言い、今まで固まっていたのが嘘みたいに次々と教室から出て行った。わたしはその場に取り残される。

そして、現在時が、昭和六十年の十二月から、令和四年の八月へ移行する。

今日は令和四年、八月十日、水曜日。

一瞬のあいだに、いや正確に言えば一行空いたあいだに、三十七年ほどが経過したのだ。わたしは歳をとった。動作がのろくなった。足が上がらなくなった。なんでもない上り階段でつまずくことが増えました。ホントだよ。

この三十七年をわたしは生きた。わたしなりに生きた。死なない程度に生きた。面白いことや嬉しいことも、たまには、あった。

わたしは愛用のタブレット端末で、ふっくん、こと布川敏和さんのオフィシャルブログ「ふっくんの日々是好日」にアクセスし、今日の記事を読む。

「加齢に喝」というタイトルのその記事を、ここに全文引用してみよう。

皆さん、日々是好日〜(♡) / (♡) /

加齢に喝！

暑さに勝カレー！

以上三行の下に、カツカレーの写真が載っている。まあ暑い日に、カツカレーを食べたヨと、そういうことだろう。とくにふっくんのファンでもない人が見たら、世の中にこれほど無内容な、空虚な、重みゼロのブログがあるのかと、心底びっくりするのではないだろうか。誤解しないでもらいたいのだけれど、わたしはふっくんをけなしているのではない。というのは、内容のないこと、空っぽであることは、決して無価値であることを意味しないからだ。

ふっくんは、ためになることを言おうとしない。気の利いたこと、洒落たことを言おうとしない。人の悪口を言わない。自慢をしない。どんな爪あとも残さない。

人間、五十代も後半になって、これほど軽やかで、のびのびと素直に生きられるものだろうか。わたしは純粹にふっくんを尊敬する。これは絶対に皮肉で言っているのではない。ふっくんを選んだことは間違っていないかった。

わたしだって、もっともっと、自分を空っぽにしていきたい。

空っぽになればなるほど、人間は幸福に近づいていく、とわたしは信じているから。

これからずっと。

わたしはふっくん派。

(Fin)

なんつって、こんなふうには、いかにもそれらしいことを言って終わることもできるわけだ。できるんだけど、わたしの中の何かが、このような終わり方を良しとしないんだ。つまり、大島なつき、四十七歳女性、離婚歴あり、子どもなし、アパート住まい、パート勤務、内田有紀似、その他諸々の属性を持つ現在のこのわたし、このわたしの中にある何かが。それは羞恥心のようにもあり、正義感のようにもあり、もっと低次元な別の感情のようでもある。その何かが、ただ表面上それっぽいことを言ってきたら終わる終わり方に異を唱えるのだ。

ではどんな終わり方が望ましいのだろう。わたしにとって。わたしにとって。わたしわたしわたしわたし。どこまでいってもわたしであって、わたしだけが問題なんだなーわたしには。たまにはわたしになれよと言いたい。誰に？ わたしに。

最初の方でも言った通り、わたしの言葉がわたしの現実をつくっているのだから、わたしはわたしの言葉の外側に出ることはできない。端的に言って、わたしの言葉の外側には何も無いのだ。「なんにもないね。無だよ。無」なので、わたしが沈黙してしまえばそれですべて終わるのである。外側がないとはそういうことだ。

けれどもこの外側のなさについては、わたしに特有の状況とは言えないのであって、実際のところあなただって同じようなものでしょ？ あなたの現実をつくっているあなたの言葉。あなたあなたあなた。あなたというわたし。

ところでわたしは、シブがき隊からふっくんを選ぶ、という題材において、どんな選択にもそれらしい理屈をつけることができる、とか、どんな卑小な出来事についてもそれなりの物語が生まれる余地がある、とか、そもそもそういうテーマを、伝えたかったのでは、な

いだろうか。いや、そんなテーマはない。そんな明確なテーマなんかもとまないし、だいたい「これがわたしのテーマです」と言語化できてしまう時点でそれはもう死んだテーマなのだ。わたしは思うよ。

ここに至ってわたしにできることはただひとつ。声高らかにジ・エンドの一語を放つこと。そして内部へ、外側のない内側へ、言葉の中へ閉じこもってしまうこと。これだけだ。というわけで。

(The End)

——小説はありがたいことにたいした分量ではなくすぐに読み終わった。

しかし結局のところ何が言いたかったのか。虚構性に自覚的な語り手ということはわかるけれど、そういうのは前世紀にポストモダンとか何とか言ってさんざんやり尽くされたネタなわけで、今それをやる必然性ってあるのだろうか。でもそんな忌憚のない意見を言っ

て泣かれたり刺されたりしたらイヤだし……。

感想に悩みながら目を上げると、隣に女の姿がなかった。周囲を見回してみるが目の届く限りどこにもいない。トイレだろうか、それともシャワーを浴びに行ったのか。小説を読むのにそこまで集中していたとは思えないが、女の動きにおれはまったく気がつかなかった。しばらく待った。女は戻ってこない。トイレにしては遅いし、シャワーにしては水音がしない。まさか知らないうちに帰ってしまったとか。それならそれでかまわないのだが、なんとなく不安になってくる。おれは様子を見に行くことにして立ち上がった。

部屋の奥のドアを開けると、洗面所があり、トイレとバスルームにつながっている。両方を確認したけれど、どちらにも女はいなかった。やっぱり帰ったのかと思い、ホツとしつつも納得のいかない気持ちで、洗面台の鏡を向いた。

鏡の中におれの姿はなく、代わりに女が映っていた。

わたしが映っていた。

そのときわたしはどんな姿をしていたのだろう。十歳の少女だったのか、太った中年の女だったのか、あるいはそのどれでもなかったかもしれない。

そうしてわたしは鏡の中のわたしを見つめながら、わたししかないこの狭い部屋、鏡があつて鏡だけしかない部屋、一人称の小部屋を閉じるため、おしまいの一とことをつぶやくのだった。

(了)